

上海市といえはすぐ頭に浮かぶ観光地は外灘(以下バンドという)・豫園・南京路・東方明珠塔等であろうが、これらは観光に行かれた方も多いと思うので、別の視点で400～500年前・100～150年前から現在というタテ軸の上海を書いてみたい。

1. 豫園(1559年着工、1577年完成)

この豫園は完成すると「為東南名園冠」(江南の名園で一番)といわれた。面積は現在約2万m²(約6000坪)だが当時は5万m²あった。この名園も「北京市」の中で書いた圓明園・頤和園同様1842年にアヘン戦争で勝利を収めたイギリス軍が徹底的に破壊した。今の同園は中華人民共和国成立後に造り直したものである。従ってまだ50年位しかたっていない。

さてこの豫園だが、「豫」という字にひっかかった。辞典では「うれしい、楽しい、のんびりしている」の意と出ている。また河南省の略称であるが、古代「夏」の時代の九州の一つ豫州に河南地方が属していたことに由来する。豫劇(ユージュ)という劇も河南地方に伝わる伝統的な演劇である。人名にも使われるとあるので豫さんという人の庭園かとも思ったが、ガイドブックには藩允端という人が父親のために作った私園とある。なぜこの名園を「豫園」と名付けたのだろうか。あるガイドブックに「豫」は平安という意味とあったが、私は納得していない。

ちなみに上海市の略称は「滬」(フー)である。この字の意味は、その昔小さな漁村であった上海地方に広く使われていた竹編みの漁具のことである。北京と上海を結ぶ鉄道路線の名を京滬線というが、略称は一字なので車のナンバー等いろいろと使われている。(北京の略称は京または燕)

2. 上海の城壁(16世紀に築城)

悪名高き倭寇は、13～16世紀(元から明の時代)に瀬戸内海や九州の海賊が中心となり、戦いを挑んだり中国の沿岸で略奪行為を行った。しかし後半は、中国人が倭寇となって悪事を働くことが増えていった。

上海地方は16世紀ころよく攻められたため、これに対処するために短期間で城壁を築き上げた。城壁内は、租界時代に豫園は破壊されたものの外国人は自由に出入りできない

中国人だけの街だったようだ。しかし残念なことに城壁は近年とり壊され、その跡地は、「中華路」と「人民路」の環状道路となっている。地図で確認するとたしかに楕円形の城壁のあとが伺える。中国各地に残存する城壁はほとんど長方形であるが、円形のものはとても珍しいものであるらしい。

浦東地区の高層ビル群、リニアモーターカー、高速道路、むかしながらの庶民の住まいに代わる近代的高層マンション群、網の目の地下鉄網など…、近代化ばかり目につく上海市であるが、古い上海のたたずまいや雰囲気も残すようにすればもう少し地に足のついたイメージの都市となっていたであろうと思った。

3. 水郷・朱家角の放生橋(1571年完成)

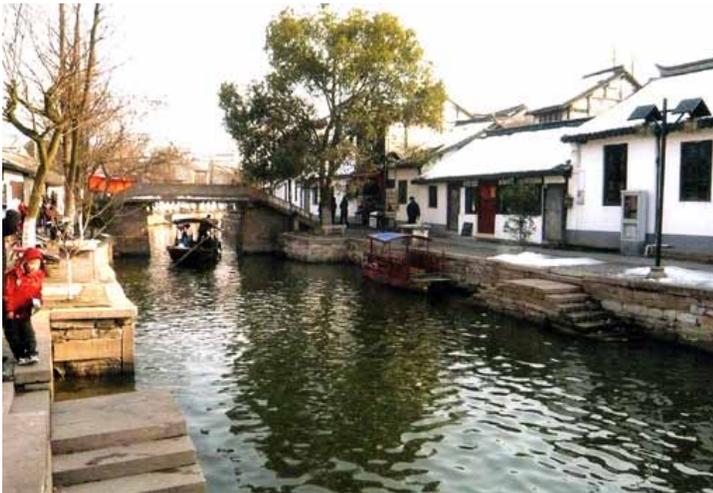
上海市の西のハズレから太湖に至る地域は、大小の湖、縦横に走る運河の中に古鎮が点在している。周荘・同里等と共に朱家角は有名である。瓦屋根、灰黒色の家壁、石畳の路地、行き交う小船には生活の匂いがあふれ、のんびりとしてやすらぎを覚える風景である。この地方は、後背地の豊富な農作物の流通路にあたり、10世紀から12世紀ころにかけ「鎮」と呼ばれる水運の町があちこちに出来はじめ、発達していった。唐の終わりころから宋の時代にかけてである。

どの鎮も似ているが、朱家角で有名なのが明代に築造された放生橋である。石造りで中央部が高くなっており、なだらかな二等辺三角形となっている。全長72mの水郷地帯最大のこの橋は5つのアーチがつけられ、中央部のアーチの下は比較的大きな船が通ることができる。中国には、私の好きな石造りの橋がどこにでもあつたが、この堂々とした放生橋は他では見られない。古びたベージュの色合いも歴史を感じさせ一度見ると忘れられない。

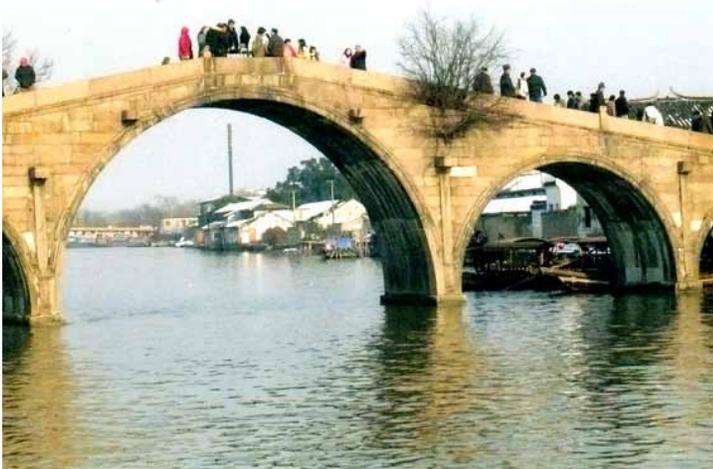
さてこの橋の名前の「放生」(ファ



豫園商場の前で



水郷古鎮風景



放生橋

ンション)であるが、中国人の友人がメモに書いて教えてくれた。それには「放生とは生き物を放生かすこと。仏教の信徒として来世に自分はもっと幸福でもっと順調で生き返るために、今生に慈悲心をもって家畜や鳥はもちろん、信仰の強い人は蟻でも殺さないで生かす」とあった。広辞苑で調べると「ほうじょう」と読み「捕えた生き物を放ち逃がすこと」と書いてある。

中国を旅すると、ときどき「放生池」や「放生橋」を見かけるが、このような形で仏教が実践されているのには感心した。残念ながら日本では私は見たことがない。これも広辞苑によると「放生会」(ほうじょうえ)と言って仏教の不殺生の思想に基づいた儀式とあり、旧暦8月15日(中秋節)に行われるそうである。石清水八幡宮(京都府)の放生会は有名」とある。いつかここを訪ねてみたい。

この朱家角には2008年2月上旬の春節休暇を利用して友人たちと5人で行った。その中に夫婦が一組いたが、この二人は橋のところに来ると中央部に向かって石段を登って行った。橋の上には、バケツに小さな魚をいっ

ぱい入れて、通行する人に売っている人が数人いる。つまり、それを何匹か買って橋の下に行き、運河に放してあげると「放生」という善行をしたことになるようだ。遠くから見てみると友人夫婦はそこで魚を買い下において運河にそっとその魚を逃がしてやっていた。ご主人はガンの治療中だったのである。私は二人の気持ちが痛いほど分かった。

4. 和平ホテル(和平飯店・北樓)(1929年竣工)

1842年の南京条約後約100年間の租界時代の中で、特に20世紀に入り黄浦江沿いには、欧米様式の建物が建てられバンドと呼ばれるようになりエキゾチックな雰囲気をただよわせている。ちょうど本年9月、「シャンハイ」という話題の映画を見たが、第2次世界大戦突入直前の1941年の租界の情景が見事に映し出されていた。

当時の中国人にとっては苦々しい存在であったことだろう。しかし、時代が下って今やデートスポット、一大観光スポットとなった。自国の領土で1904～5年に行われた日露戦争の激戦地である旅順の203高地には、「勿忘恥辱」(恥を忘れるな)の小さな看板が立っているが、このバンドもいってみればこの看板を建ててもいいところである。

この和平ホテルだがバンドで一番有名な建物である。所有者のイギリス商人の名前をとりサッスーン・ハウスともいわれる。北樓の1階にある「爵士酒吧」(爵士はジャズ、酒吧はバーも意)に行かれた方もあろうが、とても素晴らしい空間である。ここで毎夜ジャズバンドの演奏が行われる。ジャズを演奏するのは70才位の老人ばかりでこれが一つの評判を呼んでいる。演奏する曲も今どきのテンポの激しい、落ちつきのない曲はない。「A列車で行こう」「セントルイスブルース」「スターダスト」「ムーンリバー」……などの胸にジーンと来る曲ばかりである。

欧米人の客も多く、お酒をのみながら聞くこの場所は別世界である。1930年代の華やかな租界の一部を体現した印象を持つが、一方では租界には墮落した闇の世界が広がっていた。

5. 宋家の三姉妹(19世紀末～20世紀)

19世紀末、上海で「昔、中国に三人の姉妹がいた。ひとりには金を愛し、ひとりには権力を愛し、ひとりには中国を愛した」と言われた三姉妹が生まれた。中国の近代史を見るとき、この三姉妹を抜きには語れないであろう。

長女の霽齡は孔財閥の御曹司と結婚した。

次女慶齡は「中国革命の父である孫文の夫人」という修飾語が不要なほど有名である。反帝国主義運動に生涯を捧げ、「国母」として中国国民に慕われているらしい。孫文の死後は最終的に共産党と共に歩んだ。1949年10月1日の中華人民共和国の成立を天安門上で、毛沢東が宣言した時、そのそばに慶齡は6人の副主席の一人として立っていたのである。「三民主義」を掲げた孫文は天国でどのように思っているであろうか。彼女の故居は上海市の淮海中路にある。北京にも故居があり、どちらも観光名所である。

三女的美齡は蒋介石夫人としてこれまた有名である。第2次世界大戦中の1943年2月、米連邦会議における流暢な英語による抗日演説で満場の拍手喝さいを受け、米国の親中反日を決定的なものとした。このときの画像をいつだったかテレビで見たが、その時の堂々たる演説は忘れることができない。中国の激動期を三人は別々の道を歩んだが、歴史に大きな足跡を残した。彼女たちからは中国女性の強さをまざまざと見る思いがする。上海の女性は強いと言われるが、ここから来ているのではないか。

6. リニアモーターカー(2003年末完成)

中華人民共和国がスタートして50年余り後、中国はリニアモーターカーを世界で初めて導入した。チケットには「磁浮列車」と書かれている。世界初といっても自国で技術開発したものではないから、あまり自慢できるものではない。

2007年8月に乗車したが乗車券は50元だった。開通当初は70元だったらしいがなぜか値下げしている。面白いのはチケットの裏に「大人1人について1.2m以下の背だけの児童は無料。1.2m以上は大人料金」と書かれていることである。年齢や学年ではなく背の高さで判断するのは合理的といえ合理的かも知れない。学生証など身分証明書がなくてもすむわけであるし。発育のいい子は割を食うけれど……。

乗った感想は、「最高時速430kmは、翼があれば空に飛び立つ速さである。正直こわいと思った。二度と乗りたくない」である。このリニアは地下鉄2号線の龍陽路駅で乗るわけだが、途中駅はなく約7分で上海浦東空港についた。次は何を世界で一番に導入するのであろうか。

7. 上海万博(2010年5月1日～10月31日開催)

中国での正式な呼び方は、「上海世界博覧会」で略して上海世博会と言った。上海市の母なる川、黄浦江の両岸328ヘクタール(大阪万博は180ヘクタール)に会場を

つくった。この場所は以前、江南造船工場があり、国はこの工場等を別の場所に移し用地を確保した。友人はこのあたりは中国の近代工業発祥の地と教えてくれた。

世博会開催にあたり、何でも世界一でなければ気のすまない中国政府は、入場者数の目標を大阪万博を超えるため、7000万人(1日当り役40万人)とし、上海市民にはタダの入場券を配ったり、かなり無理をしながら目標を最終的にクリアした。

4月下旬から湖南省の張家界への旅行の帰りの5月3日、1日だけこの世博会を見ることができた。旅行社が予め手配してくれた入場券は「指定日入場券」で200元であった。当日はかなり込み合う覚悟で行ったが、初めの3日間は当日券を売らず予約客のみ入場できたらしく、ゆったりと見ることができた。約12万人とあとで聞いたが40万人の予定が12万人であるからゆったりしているはずである。

それでも日本館は1時間半待ちであり、中国館の2階・3階は予約券がなければ入れないので、客の入りが比較的少ない国のパビリオンを5～6カ所見た。中国館のデザインはさすがに印象に残るものであった。閉会後はどうするのであろうか。日本館のデザインは蚕のまゆの形だったが、私としては期待はずれだった。一番心に残った風景は対岸に渡るとき船から見た会場の遠景であった。黄浦江の川風に吹かれながらいつまでもデッキから眺めていた。

▶おわりに

上海は、“滬”の時代から、水郷古鎮が形成されていき、後背地の農業基盤のもとに次第に大きな町を形づくっていった。16世紀に倭寇に荒されることがあったが海運にとって重要な拠点として成長していった。

近年に至り、清国の古い政治・経済・軍備体制は、産業革命を経てすべてに近代化された英国に圧倒され、英国をはじめとする諸外国に「租界」という治外法権の地を提供せざるを得なくなった。さらに三合会等の裏社会組織はアヘンや賭博等で暗躍した。この地域は無政府状態ともいえる地となり「魔都」と呼ばれる都市となった。

そして1921年魔都上海のフランス租界地において中国共産党の第1回全国代表大会が開催され、紆余曲折しながらも中華人民共和国の成立に大きな役割を果たした上海。今は世界の経済を動かすほど成長した上海は50年後はどのような姿を見せるのであろうか。

——ともかく田舎の漁村であった上海は、歴史の波に翻弄されながら巨大都市に変貌した。半世紀後の中国はもはや発展途上国という方便は通用しない。国際社会に緊張感を与えない、責任ある大国に導く上海であって欲しい。